

医療と社会

不妊の悩みサポート大切

「代理出産」がさまざまな形で注目を浴びている。米国の女性が代理母になって双子の母となったタレントの向井亜紀さん。祖母が孫を産む代理出産を手がけた諏訪マタニティクリニック(長野県)。生命倫理をめぐる議論や、生まれてくる子どものための法的な問題の整備は、医療技術の進歩に追いついていない。不妊治療に携わる人たちに思いを聞いた。

(福沢英里)

表れている。だが、当事者の思いは複雑だ。不妊治療を受けた経験のある愛知県臨床心理士の女性(四三)は「やめどきの折り合いがつかなくなるのが心配。無間地獄を想像する」と話す。不妊に悩んでいたころは「子どもがあつて、はじめて家族」「子ができて一人前」といった周囲の言葉に傷つき、自分を責めたこともあった。でも夫婦で話し合い「二人きりでも、家族なんだ」と思えるようになって、吹っ切れた。

名古屋市の非営利の不妊サ

ポートサークル「ガーネット・カフェ」を運営する田中美香さん(四五)も「不妊治療を七年ほど続け、一千万円ぐらいつき込んだ。可能なら、代理出産をやってみたいと思ってきた」と話す。毎月の人工授精のほか、体外受精も試みた。今も子どもを希望する思いは断ち切れたわけではないが「自然の摂理」と思えるようになった。自身の体験が、不妊に悩む女性たちの手助けになればと活動する。ホームページ(HP) <http://www.h2.dion.ne.jp/~gaca> (四)での質問にも応じる。

よく考えて結論を

選択の理由は何か



不妊治療は丁寧なカウンセリングに基づき診察が行われる—名古屋市内で

大阪府立大看護学部の吉田和枝講師は、代理出産に対する看護学生の意識について調査結果をまとめ、ことし四月、日本母性衛生学会の学会誌に発表した。調査は、二〇〇四年一月と十月に、看護短大生百七十五人を対象に実施。がんで子宮全摘出手術を受けた妻と夫の受精卵を代理母の子宮に移植する代理出産について、「賛成」と「どちらか」というと賛成」と答えた学生は75%にのぼった。十四年前の同種調査では、代理出産容認は15%程度。意識の変化がくつきりと

は、心理的なサポートの大切さ。

何のための不妊治療なのか、代理出産を選ぶ理由は何かを、専門家の助けを得ながらじっくり考える時間をもち、結論を出してほしいという。「生まれてくる子どもが、自分自身を誇りに思えるためにも必要」と言う。

不妊治療に取り組む、おちウイメンズクリニック(名古屋市)の越知正憲院長も同意見だ。

「代理出産も不妊治療も、妊娠が目的ではなく、生まれてくる子の幸せを第一に考えるべきだ。あなたをこの手に抱きたかった、どうしてもほしかったから代理出産を選んだと、子どもにきちんと説明

し、愛情を注いで育てていく覚悟があるか、よく考えてほしい。子どもを守る法整備がされた後なら、国内でも代理出産はあってもいいと思う」アモルクリニック(横浜市)の児島孝久院長は「そこまでして子どもがほしいのか、という思いはある。日本では認められていないので、海外に行くのは個人の自由だが」と批判的。

星ヶ丘マタニティ病院(名古屋市)の石丸忠敬院長も「生命の危険性や精神的な負担を第三者に託す代理出産は、不妊治療の範囲を超えている。妊娠中に母親のおなかで母と子のきずながはぐくまれることが無視されている」と危惧する。